

『御津の浜松』における首尾照応をめぐる覚書： 「とこの浦」と「にほの海」と

辛島, 正雄

<https://doi.org/10.15017/1398459>

出版情報：語文研究. 114, pp.1-16, 2012-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『御津の浜松』における首尾照応をめぐる覚書

——「とこの浦」と「にほの海」と——

辛 島 正 雄

一 はじめに

さきに筆者は、『御津の浜松』の作品構造について論じたさい、そこには主人公中納言と式部卿宮との対立の構図が根底に横たわっていて、『浜松中納言物語』という通行の題号が喚起するイメージに沿って、中納言と女たちのかかわりを描いた物語であると見る従来の理解（誰を重視するかに違いはあるが）とは別に、ふたりの男による、女をめぐる闘争の物語として読み解けることを述べた（拙稿A「交錯する『むねいたきおもひ』——『御津の浜松』読解のための覚書——」「国語と国文学」89巻7号、二〇二二年七月）。そして、そのような物語の特質の闡明のためには、なにより最終巻の存在が重要不可欠であり、巻

四終盤の、ふたりの男の対座の場面を転機に、結末に向けて物語の方向性が一気に絞り込まれることを明らかにしたのであった。

本稿では、まず、そのような物語の転換点にあつて強い印象を残す、式部卿宮と中納言との間に交わされた歌の応酬を取り上げ、詳しく検討するとともに、そこに用いられた歌ことばに注目することで、この物語における首尾照応のありようについても、考察を及ぼすことにしたい。

二 「うべこそはいそぎ立ちけれ」

——中納言と「とこの浦」(1)

従来、『御津の浜松』が、中納言に対する式部卿宮による復

響劇として、積極的に読み解かれることがなかったのには、理由がある。それは、現存巻一から、いくら丁寧に読みすすめても、ふたりの関係性に注意が向けられるようには、ほとんど描かれていないからである。ふたりがうちとけて親しく話を交わす様子も、現在のわれわれは、巻四の終盤に到ってはじめて目にするようになるのだから、その後、吉野姫君奪取へと奔る式部卿宮の行動が、きわめて唐突に映るのも、無理もないことであった。ただし、それはあくまで、現存する巻一を起点に物語を理解しようとするからであって、現存『御津の浜松』が、首巻を闕く不完全な状態で残されている事実を、十分にわきままえていないところに問題がある。

総じて、物語が最終局面を迎えようとするとき、ここでは、物語内の過去、なканずくその始発が強く意識されることが、少なくとものように思われる（例えば、光源氏の物語の首尾に「まほろし」の語が立ち現れるごとくに）。ところが、『御津の浜松』にあつては、肝腎の始発部が失われ、詳らかでない点が多いのだ。拙稿Aに先立ち、筆者は、『御津の浜松』をトータルに理解するにあつては、「最終巻を読み解きながら、ここに到るまでの物語の展開相を丁寧にに検証・再確認してゆけば、散逸した首巻をも含めて、物語の目指そうとした世界がいかなるものであつたかは、かなり鮮明になつてくるように思われ

る」(拙稿B「むねいたきおもひ」考——『御津の浜松』最終巻読解のための覚書——「語文研究」111号、二〇一一年六月、二頁)と述べたことがあつたが、それを実践した結果が、式部卿宮への着目であり、さらには、宮と中納言とのかわりをおしての、物語の全体像の捉え直しなのであつた。そのような読み解きを行ううえで鍵となつたのが、巻四終盤のふたりの対座の場面であることも、前述のとおりであるのだが、その直後、中納言は、勤行に忙しい尼姫君に遠慮し、吉野姫君のもとに赴く。すると、そこでは、にわかにに式部卿宮への警戒心を強めた中納言が、宮は「人(〓狙いを定めた女)の心、あやしきまななびかい給へる癖おはする人」であるとして、その油断ならぬ人となりを語り、姫君にも宮への注意を促すべく、「言多く、あらししことを言ひつづけ」(三五六頁。以下、『御津の浜松』の引用は「新編日本古典文学全集」本によるが、心中思惟の範囲を「」で明示したほか、私意により句読点、表記等を改めた場合がある)るのであつたが、そんなことのあつた翌朝、中納言がすっかり寝過している、「いづくよりもなき文の、いとえんなる」(三五七頁)が届き、以下のようにつづく。

「大弑のむすめのにや」と思ひてひきあげたれば、式部卿宮の御文なりけり。「夜(底本に「夜る」とあり、あるいは、もと「夜へ」「昨夜」であつたか)の御けしき、静心なげなり

しも、『ことわりなりけり』と見あらはしはべりけるかな」とて、

うべこそはいそぎ立ちけれとこの浦の波のよるべは
なかりけりやは

文字様など、わざとをかしげならねど、書きざま、墨つきなど、書き馴れ、見どころあるさまぞ、をかしきや。

(三五七頁)

式部卿宮から届いた歌の初二句「うべこそはいそぎ立ちけれ」とは、ふたりが対面しており、話がいつ尽きるともなくつづくので、「夜ふけはべりぬらむかし」(三五四頁)と云って中納言が座を立ち、式部卿宮には上(妻である中君)の待つ部屋へ行くよう「せめてすすめ入れたてまつり」、「じしんは尼姫君のもとに向かうのを、宮が、「(尼姫君への)ゆかしき御心絶えず、胸いたし」(三五四頁)と感じるくだりを承けたものであるが、さらに、このすぐあとで中納言が推測するとおり、「すすめ入れたてまつりてしを、おほしあやめて、人つけ給」(三五八頁)うて、忍びの通いどころがあることを突き止めたことが背景にある。歌に先立ち、「『ことわりなりけり』と見あらはしはべりけるかな」とあるのも、そのことをほめかしたものである。

三句以下は、諸注釈書の説くとおり、近江国の歌枕「鳥籠

の浦」に寝床の意をきかせ、浦波が寄せる岸辺ではないが、寝床をともしるために立ち寄る相手がいたとは、これは驚いた、ほどの気持である。式部卿宮と中納言との対座の場面では、ふたりの間で、「わがやうには、『聖つくらず』とか、「そは、『聖ぞ下は凡夫なる』ぞ」(三五二頁)といった応酬がなされていて、その解釈についても拙稿Aに私見を述べたところであるが、宮からすれば、「聖」づらをした中納言の「下」に隠された「凡夫」の正体、今こそ見たり、といったところであり、してやったりとばかりに手紙を書く宮の様子が、髣髴する。

「うべこそは」の歌は、以下、何度か作中に引かれることとなり、そのさいには、「とこの浦」がキーワードとなつてい

る。

①式部卿の宮は、とこの浦の波かけ給ひてしより、心を添へ給ひて、たづね聞き給ふに、……(巻四・三七〇頁)

②さばかりあるかなきかに思ひ沈みたるうつくしきは、天女の天下りたらむを見つけたらむよりも、なほめづらしく、かぎりなく、あさましきまでおほさるるに、「中納言のとこの浦ぞかし」とおほさるるを、まだ世に馴れぬけしきを、「いなや。こはいかなることぞ。……(最終巻・四

〇三頁)

③この人の本体をば、この宮も、え知り給はじ。とこの浦たづね給へりし折に、わが思ひ寄りしままに、おほし寄り、ぬすみ給へるにこそはあらめ。(四一七頁)

①は、「うべこそは」の歌を送つて以来、式部卿宮が、中納言の隠し女の素姓を探つて以来、式部卿宮が、中納言の吉野姫君を拉致した式部卿宮が、はじめて契りを交わしたさい、中納言とは寢床をともにする仲だと思つていた姫君が、意外にも処女であることを知つて驚くくんだり、③は、式部卿宮から、至急参内するよう使者を差し向けた経緯を聞かされた中納言が、「うべこそは」の歌が送られてきたさいに危惧したことがそのまま、宮による吉野姫君誘拐のかたちで現実化したと考えるくだりである。こうして見ると、『御津の浜松』の終幕へ向けての怒濤の展開は、遡れば、式部卿宮から届いた「うべこそは」の歌に端を発するものであることが、表現面からも再確認されるのである。

三 「にほの海のみあまもかづきはせぬものを」

——中納言と「にほの海」(1)

式部卿宮からの不穏な手紙に対して、中納言の返事は、次のようなものであった。

にほの海のみあまもかづきはせぬものをみるめ寄せける風の吹くらむ

おのづから聞こしめしてむ。あなかしこ、あなかしこ。(三五八頁)

諸注釈書を見ると、さきの式部卿宮の歌については、その理解にさしたる違いは認められない。ところが、一転、この中納言の歌に関しては、解釈に難渋していることが知られる。まずは、それぞれに説くところを確認しておこう。

[1]宮下清計校註『新註国文学叢書 浜松中納言物語』(一九五一年、講談社)

【頭注】私は別段こつそり隠れてここへ来た訳ではないから、あなたの御目にもとまつたこととせう。前の歌に「この浦の浪」とあるのを受けて、その縁で、「にほの海のみあまも云々」と詠んだのである。「みるめ」は「海松」と「見る目」とを掛けてゐる。(三二七頁)

[2]松尾聰校註『日本古典文学大系77 浜松中納言物語』(一九六四年、岩波書店)

【頭注】「私はひそかに女のもとに通うようなことはしないのに、どうして見たなどと言ひよこしてこられるのでしょう。(中略)」の意か。↓補注七六三。(三七八頁)

【補注】歌の意がよくつかめない。宮の歌に「床の浦の浪

のよるべ」とあつたのをうけて「にほの海（琵琶湖）の
あま（漁師）も云々」と「あま」に自分をたとえ、又、
「みるめ」に「海松布（めみる）」（海藻の名）と「見る目」を
かけている。「かづきはせぬ」は、「こうしてここに来て
いても、女と契りはしない」の意と考えられないことも
ないが、そんな弁解をしても通じるはずはないし、又、
こうした場合、さとられておられると思つても、あくまでも
しらを切るのが常識だから、女のもとに通つてゐるの
ではない、別の用事でここにいるのだの意とみるのが適
当であろう。下句は、上に「など」が省かれてゐるものと
見た。「らん」に原因・理由などを推量する用法があり、
その疑問の理由については、歌に限つては「など」を省
略することがあるのは、例が多い。「こうして海松布をう
ち寄せた風が吹いている（あなたが見たと言ひよこして
来られる）のは、どういふわけでしょう」の意となる。
（四九四頁）

[3] 久下晴康編『浜松中納言物語』（二九八八年、桜楓社）

【頭注】「にほの海」は琵琶湖。「海人」に自分を比す。ま
た、「みるめ」は「海松布」（海藻の名）と「見る目」（見
た様子）を掛ける。「風」は宮の手紙。（二八五頁）

[4] 池田利夫校注・訳『新編日本古典文学全集27 浜松中納言物

語』（二〇〇一年、小学館）

【現代語訳】琵琶湖の海人が潜つて漁もしないのに、海松
布を浦にうち寄せた風が吹くように、私に隠しごとはな
いのに、見たなどと吹聴しておいでですね。（三五八頁）

【頭注】歌意が定かでない。『寢覚』巻四、御門「にほの海
や潮干（しほ）にあらぬかひなさはみるめかづかむかたのなき
かな」。「永久百首」水海、常陸「にほの海はみるめも生
ひぬ浦にてやむべかづきする海人なかりけり」などによ
ると、琵琶湖では海人が海松布（めみる）（海藻。「見る目」に掛
ける）を採らなかつたという。「かづく」は、水中に潜つ
て貝や海藻を採ること（三五八〜三五九頁）

[5] 中西健治著『浜松中納言物語全注釈』（二〇〇五年、和泉書
院）

【口語訳】琵琶湖あたりの海女が水に潜つて魚を捕つたり
はしないのに、海松布を浦におし寄せた風が吹くよう
に、海松布の音に通う「見る目」、見たと、どうして言い
寄こすのですか。（二〇四二頁）

【注釈】中納言の歌。「にほの海」は近江国の歌枕。片桐洋
一氏『歌枕歌ことば辞典（増訂版）』によれば「にほの海」
が和歌に詠まれるようになったのは平安時代末期になつ
てからという（三二五・三二六頁）。浜松には巻一（二）に

「別れにし我がふる里のにほの海に」ともある。「かづき」は水中にもぐることに。「みるめ」は海松布（海藻の名）と「見る目」を掛ける。一首の意は、にほの「海」脱か——辛島注）海人でもその本来の仕事である潜水をしないのと同様に、私は女のもとに近づいたりしないのにもかかわらず、沖の方では風が強く吹いているからであろうか、海松布が寄せてきたように、妙な風評が立つものだなあ。前の式部卿の宮の皮肉な歌に対して無実を訴えている歌である。（一〇四六頁）

これらを一覧すると、「にほの海」の語は式部卿宮の歌に「この浦」とあるのを承けて同じ国の歌枕で応じたものがあり、「あま」には中納言ししんを寓し、「みるめ」は「海松布」と「見る目」との掛詞である、といった理解では、ほぼ共通している。にもかかわらず、納得のゆく解釈に到らないのは、どこかに問題があるはずである。思うに、そのポイントは、「かづき」の語の理解にあり、それを「みるめ」と結びつけていないところに原因があるのだろう。そのようなか、『全集』のみ、「にほの海」「かづき」「みるめ」といった一連の語を用いた歌を例示しているのは、注釈の基本に立ち返るためにも、注意される。そして、用例からは、「琵琶湖では海人が海松布（海藻。「見る目」に掛ける）を採らなかつた

という」との理解まで導き出しているのだが、惜しいかな、そのことが歌の解釈に反映されていないのである。

いま、私に中納言の歌の解釈を試みれば、次のようになる。

「にほの海」が、式部卿宮の歌の「この浦」を承け、同じ近江国の歌枕で応じたものであることは、もちろんである。そして、「にほの海（琵琶湖）」は、「海」とはいえ淡水なので、潮海では採れる「みるめ（海松布）」が、ここでは採れない。よって、琵琶湖で漁をする「あま」も、採れもしない「みるめ」を求めて、わざわざ「かづき」をすることはない。私も、琵琶湖の「あま」がそうであるように、「みるめ」を求めることとはないので、女との「見る目」もまた、同様に望んだりしない。だから、私に「この浦の波のよるべ」があることを見届けたなどは、言いがかりも甚だしい。そんな「みるめ」を採らない生活をする琵琶湖の「あま」のもとに海藻の「みるめ」があるとすれば、それこそ不可思議千万。その「みるめ」は、琵琶湖の波が岸に打ち寄せるはずはないから、どこからか風が吹き寄せでもしたのである。同様に、女との「見る目」もない私に、いったいどんな女との風評が立ったのやら。

「みるめ」が「海松布」と「見る目」との掛詞であることは、諸注釈書が等しく指摘するとおりであるのだが、『全注

「積」の口語訳に、「海松布の音に通う『見る目』、見たと、どうして言い寄こすのですか」とあるような解釈（『大系』の頭注に「どうして見たなどと言いよこしてこられるのでしょうか」とあるのも同様）は、「見る目」がもつばら、男女間の逢う機会の意で用いられる歌ことばであることからすると、不審とせざるを得ない。『全集』の頭注に参考として掲げられた『夜の寢覚』巻四、帝から中君に送られた歌の大意は、琵琶湖が、引き潮のない淡水湖ゆえ、海人が潜ったところで海藻の「みるめ」を採るすべもないように、私もあなたとの「見る目」＝逢瀬を得られず、かいたくない思いをすることだ、といったもので、「にほの海」で「かづき」をしても「みるめ」が採れないというのは、女との「見る目」がないことをいうレトリックである。いまひとつの『永久百首』の歌も、琵琶湖では、海藻の「みるめ」も生えない浦であるがゆえに、なるほど「かづき」をする海人もいないのであったよ、というのだが、ここでも、「見る目」の意をきかせて、見込みのない恋など誰もしない、というのである。

また、「かづく」に関しても、潜るという語感に引かれてか、「こつそり隠れて」（『新註』）、「ひそかに」（『大系』）、「隠しごと」（『全集』）といった解釈がなされているが、あくまで「あま」の仕事という語であって、「にほの海にあま」の場合、「海

松布」を求めての「かづき」はしない、といているだけのことである。「にほの海人でもその本来の仕事である潜水をしないのと同様に、私は女のもとに近づいたりしない」（『全注釈』）との解釈もあるが、「本来の仕事である潜水をしない」のであれば、それはもはや「あま」とはいえないし、「かづく」を「女のもとに近づく」く比喻と見るのも、誤解である。女との関係をいうためには「みるめ」の語が用意されていること、右に述べたとおりである。

以上のように、中納言の「とこの浦の波のよるべ」を採り当てたとして追及してくる式部卿宮に対して、「にほの海」に「みるめ」はないとしらをきる中納言——ふたりの応酬は、近江国の歌枕を含んだ表現によって綾なされているのであるが、じつは『御津の浜松』において、「とこの浦」「にほの海」いずれもが、これ以前に使用履歴のあることばなのであった（「にほの海」については、すでに巻一に見えていること、『全注釈』に指摘があった）。

四 「ひとりしも明かさじと思ふとこの浦」

—— 中納言と「とこの浦」(2)

「とこの浦」の語は、「うべこそは」の歌以前には、現存諸

巻のどこにも見えない。しかし、『全集』『全注釈』『全注釈』が指摘するように、散逸首巻にまで遡ると、その使用が確かめられる。『風葉和歌集』に、次のようにある。

中納言のもとに、暁立ち寄りて侍りけるに、
いみじく尊く経を読み澄まして、「居明かし
つるにや」と見えければ、よめる

浜松の宰相中将

ひとりしも明かさじと思ふとこの浦に思ひもかけぬ波の
音かな

(巻十八・雑三・一三五七番)

『王朝物語秀歌選(岩波文庫)』所収本による)

詠者の宰相中将は、現存五巻にはいつさい登場しない人物であり、中納言とどのような関係であるのかも不明であるが、このとき、中納言の身の上に重大な出来事が起きていたことは、『無名草子』に見える次のような記述から知られる。

父宮の、唐土の親王に生まれたる夢、見たる暁、宰相中
將、訪ね来て、

ひとりしも明かさじと思ふ床の上に思ひもかけぬ波
の音かな

と言ふよりはじめ、唐土に出でたつことども、いといみじ。

(『新編日本古典文学全集』本二三三五頁)

『風葉和歌集』所収歌と較べると、「とこの浦」が「この浦」とあり、異同が見られるが、五句「波の音かな」とのつながりを考えると、「この浦」とあるのが本来のかたちであろう。こんな夜に、あなたが独りで夜明かしすることなどあるまい(宰相中将は、中納言と左大将の大君「尼姫君」との仲を疑っているであろう)、と想像してやって来たたら、意外にも、一晚中唱えていたらしい読経の声を耳にしたよ、というのである(『無名草子』の注釈書には、下句に渡唐の暗示を読み取るうとするものが多いが、つとに鈴木弘道著『平安末期物語論』(一九六八年、塙書房)第二章・第三節「浜松中納言物語評言」が批判するように、「波の音」は、「尊い読経の声をたどへたものであらう」(二二六頁)。また、宰相中将がそこまで事情を承知している人物であるなら、中納言の帰国後に再会した様子もないのは、あまりに不自然であろう)。

ふたつの歌を並べてみると、さきの「うべこそは」の歌が、独り身を装う中納言に、夜をともし過ぐす相手がいたことを知って、挑発する底(こ)のものであったのに対して、「独りしも」の歌は、女と一緒に過(こ)しているものとはかり思っていた中納言が、じつは謹直に勤めをしていたことを知って、意外に思うというものである。すなわち、ふたつの歌は、「この浦」の語を共有しながらも、その内容については対照的なものとなっているのだ。

ところで、『風葉和歌集』の詞書に記された情報だけでは、中納言が「いみじく尊く経を読み澄まし」ていた理由は定かでない。しかし、『無名草子』には、

式部卿宮、唐土の親王に生まれたまへるを伝へ聞き、夢にも見て、中納言、唐へ渡るまでは、めでたし。(二三九頁)

ともあつて、現存卷一の冒頭で語られる、「孝養のころざし」(三二頁)に衝き動かされての渡唐の実現に向けて、亡き父宮が夢枕に立ち現状を告げる(卷一では、三の皇子じしんが、「みづからは、日本の人にてなむはべりし。この中納言、前の世の子にてはべりき。ただひとりはべりしかば、たくひなくかなしく思ひはべりしにより、『九品の望みも、この思ひに引かされて、かく生まれまうで来たる』となむおほえはべる。中納言も、『かくなむはべる』と伝へ聞きて、……渡りまうで来たるなり」[四九〜五〇頁]と、唐后に事情を語っている)という、中納言にとつて、最終的な覚悟を固めさせる決定的な出来事があったおり、かれは、みずからの昂る心を鎮めるべく、暁がたまで「いみじく尊く経を読み澄まし」ていたのであるに違ひなく、偶然か、意図あつてか、そこに宰相中将が来合わせたことで、「独りしも」の歌は詠まれることとなつたのである。

五 「別れにしわがふるさとのにほの海」

——中納言と「にほの海」(2)

そのような中納言の決意を承けて、散逸首巻ではどのような物語の展開があつたものか、細かな点では不明のところもあるが、ともかくも中納言の渡唐の願いは認められ、現存卷一冒頭、七月上旬に、中納言は無事「もろこしのうむれい(温嶺)」に到着した。そこを発つて、次なる「かうしう(杭州)」に泊つたおり、眼前の光景から、中納言は、さつそく故国へと思いを馳せる。そこに、いまひとつの語、「にほの海」は現れる。

その泊り、入江のみづうみにて、いとおもしろきにも、石山の折の近江の海思ひ出でられて、あはれに恋しきこと、かぎりなし。

別れにしわがふるさとのにほの海にかけをならべし
人ぞ恋しき(三一頁)

渡唐以前に、中納言は誰かと、石山寺に詣でたおり、鴉鳥のごとく相並んで琵琶湖をながめたことがあつて、そのときのことを思い出しているわけであるが、恋しく思う相手が左大将の大君(尼姫君)であらうことは、従来から指摘のあると

おりである。残念ながら、散逸首巻において、ふたりが石山詣でをしたとの記事は、ここ以外にはいっさい残されていないのだが、こうして、渡唐後、まっさきに回想されるのがこの思い出であるというところからしても、そこではふたりの間で、「にほの海」の語を用いた歌が詠み交わされていたことも、十分に考えられる。^(注)

巻一での中納言は、転生した父宮に会うという確固たる目的をもって唐土に到着したわけであるが、その後、物語そのものは、その父の生母である唐后への憧憬と、その人と悟らぬままのひそかな契りへと、話題の重心が移ってゆく。そのいっぽうで、故国への望郷の念、なかんずく左大将の大君への思いも、繰り返し記されている。

ところで、散逸首巻にあった歌としては、『無名草子』に三首、『後百番歌合』に二首、『風葉和歌集』に六首が知られる(異なり歌数は、九首)のであるが、さきに掲げた宰相中将の歌と、渡唐を前にしての式部卿宮と中納言との惜別の贈答を除けば、残りの六首すべてが、中納言と左大将の大君との仲にかかわるものである(そのうち、中納言渡唐後の大君の独詠歌とおぼしきものが三首を占める)。例えば、

もろこしに渡るとて、道より女のもとに遣

はしける

浜松の中納言

身に添へる面影のみぞこぎ離れ行く波路とも遅れざりけり

(『風葉和歌集』巻八・離別・五三五番)

とある「女のもと」とは、明らかに左大将の大君であるし(身に添へる面影)とは、「にほの海にかけをならべし人」のことである)、
渡唐の船に乗るとて、都へ

かきくらす涙は袖に騒ぎつつもろこし船に今日ぞ乗りぬる

(『後百番歌合』二十九番右・二五八番)

『王朝物語秀歌選(岩波文庫)』所収本による)

と、「都へ」託された文も、母上や左大将の大君に宛てたものであつただろう。こうした渡唐以前の物語のありようからすれば、現存巻一の最初に現れる歌が、左大将の大君を偲ぶ「別れにし」の歌であることは、素直に納得できるところである(なお、散逸首巻では、中納言渡唐後の人々の動静についても筆が及んでいて、中納言が夢想だにしない種々の事態が続発するのであるが、それらの事実を中納言が知るのは、帰国後のことである。ただし、首巻が失われる以前の読者は、大君の出家や女兒出産をも含む物語のその後を承知のうえで、時間的にやや遡って始まる現存巻一を、読んだはずである)。

六 「いしの浦」と「にほの海」と

このようにして見てくると、『御津の浜松』において、「と

この浦」と「にほの海」の語は、いずれもが物語の始発部において、かたや中納言を渡唐へと駆り立てるきっかけとなる場面で用いられるいっぽう、いまひとつは日本に残すことになる左大将の大君との間柄にかかわることばとして、印象的に使用されていたかと思われる。とはいえ、その後、ふたつのことばは、とくに反芻されることもなく、その記憶もすっかり薄くなった（現存本で読むかぎり、「この浦」は未知の語でさえあるわけだが）、そんなころ、物語が最終局面を迎えようとする巻四の終盤に到り、なんとも唐突に、かつての文脈からは切り離された状態で、にわかと呼び戻された恰好なのである。しかし、ふたつのことばは、まったく脈絡もなく、たまたま首尾に現れたという理解で済ませてよいものなのであろうか。

あらためて、巻四における式部卿宮と中納言との歌のやりとりを見ると、ふたりはそれぞれ同じ近江国の歌枕を用いながらも、かたや「この浦の波のよるべはなかりけりやは」と、契りを交わす女がいたではないかと迫り、かたや「にほの海のアまもかづきはせぬ」と、「みるめ」¹女との契りはないと反論するものなのであったが、では、じっさいのところはどうであったのか。たしかに中納言に、「この浦の波のよるべ」は存在した。しかしそれは、式部卿宮が想像するよう

な関係ではなく、中納言のいうとおり、「みるめ」を伴わぬものであった。だからこそ、のちに宮が吉野姫君を誘拐し、契りをおぼしたさい、前掲②のような不審を覚えたのである。つまりここには、「この浦」に「みるめ」がない²女とともに夜床にいても契りは交わさないと、いう、中納言と吉野姫君との現状が、嘘偽りなく反映されているわけである。とはいえ、事情を知らぬ者からすれば、そのような男女関係など、容易には信じがたいところであらう。

近江国の歌枕を使用するとき、そもそも「あふみ」の語が「逢ふ(身)」の連想を誘うことばなので、「この浦」との連携にはなんの違和感もない。しかし、「にほの海」には「みるめ」がないと表現した途端に、「あふみ」とは両立せず、いわば自己撞着に陥ってしまう(ただし、「みるめこそあふみの海にかたから吹きだにかよへ志賀の浦風」〔後拾遺和歌集〕巻十三・恋三・七一七番/伊勢大輔)のように、「みるめ」のないことが「あふみ」と抵触しない詠みかたもある)。もちろん、ふたりの歌のやりとり「あふみ」の語がそのまま使われているわけではないのだが、「この浦」を「にほの海」で承けたところに、「あふみ」が意識されていることは疑い得ない。

じつは、巻三、七月七日に参内した中納言が、帝の召しにより、式部卿宮も同席するところで、唐土の話をする場面の

直前に、中納言が唐后へと思いを馳せるくだりがあり、その最後に、次のような一節がある。

……おぼしわびつつは、み吉野に、(中納言) みづからこそありしままにえまうで給はね、御消息は四五日を隔てて(「隔てで」とも解し得る。大槻修編『平安後期物語選』「一九八三年、和泉書院」所収「浜松中納言物語」「三角洋」校注「二二頁を参照) たてまつり給ふ。こまやかなる御心しらひ(『全集』に「御心しらひ」とあるのは不審。底本に「つ」なし)などは、すべておぼし至らぬ隈なく、多くの海山を隔てて契りを結びたてまつりて、燃えわたる(唐后への)胸の炎さむることには、ただこのこと(『吉野尼君と姫君の世話』を片時おこたらずおぼし営みても、あふみちならねば、何のしるしもなかりけり。(二六二―二六三頁)

末尾に見える「あふみちならねば」について、『全集』の頭注では、「逢ふ道ならねば」は、吉野路で『近江路あふならねば』の意を掛けるか」と説き、『全注釈』がそれを支持する(七三九頁。なお、右記三角氏校注に、「逢ふ道―近江路」との懸詞による歌語「二頁」との指摘がある)。いますこし詳しく説明を加えれば、吉野への道を何度辿ろうとも、それは近江路『逢瀬への道ではないから、中納言がいくら誠意を尽くしたところで、その思いに応えてくれるものもないのだった、というこ

とになる。すると、「あふみち」とは、諸注釈書ではもっぱら唐后との逢う道と解しているわけだが、吉野姫君との逢瀬への期待、と取ることもできそうである。物語の首尾において「とこの浦」「にはの海」ふたつのことばが照応する、そのちよūdō空白に、この「あふみち(近江路)」なる表現が用いられているのも、なにやら意味ありげに映るのである。

『御津の浜松』終盤における中納言と吉野姫君との間柄が、吉野聖の諫めによるものとはいえ、親密でありつつも男女の契りのみが禁じられるという、きわめて屈折したものであったことは、周知のとおりである。その屈折が、歌の表現面では、「とこの浦の波のよるべ」について「みるめ」なき「にはの海のあま」と承けているため、どこか噛み合わない印象が残るふたりの応酬になった、ともいえる。思うに、そのように屈折した男女関係は、散逸首巻における中納言と左大将の大君との間柄においても、基本的に変わりのないものだったのではあるまいか。巻二において、筑紫に到着した中納言は、都から呼び寄せた中将の乳母の口から、はじめて渡唐中に大君の身の上で起こった出来事を聞かされたさい、「いとど心深くのみ聞こえし人(『大君』の、われをばさまことなるものにたゆみて、うらなくなつかしびを通はい給ひしに、思ひのほかなりしを)」(三七頁)と思い返して、「妹背」となっ

た中納言への信頼から、大君が警戒心もなく親しんでくるようになったこと、にもかかわらず、その信頼を裏切つて大君と契りをもつてしまったことを反省していることから、そのことは窺われる。^(注2)

散逸首巻において、中納言は、母上が左大将の妻となつたことで、大君やその妹中君と「妹背」の仲となつた。亡き父宮を慕う中納言が継父左大将に親しむことは、容易なことではなかつたようであるが、姉妹とはしだいに打ち解け、とくに大君とは、ともに石山詣でをしたさい、仲よく琵琶湖をながめることもあつたようである。そのような関係が急展開したのは、故父宮が夢枕に立ち、中納言が渡唐の決意を固めて以後のことであつたらう。つまり、「とこの浦」の歌を詠みかけられた、その暁が、変化の起点となつているのだ。そして、渡唐を目前に控えたころ、式部卿宮との婚約も整つていたらしい大君と、中納言は一夜のはかない契りを結び、ほどなく日本を後にすることとなつた（中納言の離日と大君との契りのタイミングについては、「思ひやりなうけ近う見なして、ほどなくはるかになりにし」〔五三頁〕、「見馴れしほどなく引き別れにし」〔一七頁〕、「はるかに思ひ立ちにしほど、いみじう心乱れて」〔卷二・一三七頁〕、「もろこしに渡りしほど、かの姫君を見馴れて、ほどもなく立ち離れむ、あかずいみじかりしを」〔卷三・二六〇頁〕、「この女君にゆくりなう乱れ逢ひ

て、ほどもなく、はるかなる世界に、見捨てて、漕ぎ離れにし」〔二七一頁〕などと、繰り返し回想されているところから、そのように考える。「にほの海」をもろともにながめながらも「みるめ」のなかつたふたりが、「あふみ（逢ふ身）」となつた瞬間である。散逸首巻において、「とこの浦」を疑われながらも、「にほの海」に「みるめ」はないとして身を慎んできた中納言の態度は、物語の最終局面での、吉野姫君に対してのもの、期せずして（？）似通つたものとなつていたのである。

「妹背」の仲のささやかな（はずであつた）秘密は、中納言の渡唐後、大君の懐妊の発覚により、関係者をして大混乱に陥れた。式部卿宮との結婚は、妹の中君に婚取りするという窮余の策により取り繕われたが、この一件により、念願であつた結婚を台無しにされた宮の怨念は深く、物語の水面下に隠されながらも、中納言への報復の機会を待ちつづけていたことは、拙稿Aに詳しく述べたところである。その後、大君じしんは尼となり、左大将は中納言への憤懣やるかたなく、母上も異国へ旅立つた息子の不始末への責任を感じつつ、身の置き場もない心もちであつたらうが、当の中納言はといえ

ば、夢枕に大君が立ち、
たれにより涙の海に身を沈めしほるるあまとなりぬとか
知る（五二―五三頁）

と訴えても、不吉な「あま」の語には見向きもせず、「われを恋ふらし」（五三頁）としか受け止め得ぬ能天気さであった。^(注)「涙の海」には、ふたりでながめた「にほの海」が、意識されているのであろう。

こうして見てくると、『御津の浜松』の首尾に現れる「この浦」と「にほの海」の語は、中納言と「妹背」の関係とされるふたりの女君——左大将の大君と吉野姫君——と中納言との微妙な仲らいを表現すべく、意識的に使用されたものであるらしいことが窺われる。すなわち、それは、「この浦」と見えようと、そこには「みるめ」はないという、屈折した「妹背」のごとき男女関係を指し示そうとする表現なのであった。それでも、大君に対しては、「妹背」の仲を越えてしまふ結果となり、吉野姫君の場合は、「妹背」の仲と取り繕わざるを得ない結果となるなど、両者はすこぶる対比的・対照的に配置されているようである。そして、首尾ふたつの「妹背」の物語をつなぐ要となる人物、それが式部卿宮なのであった。

現存卷一から読みすすめるわれわれは、異国へと転生した父宮との奇跡的な再会の喜びもそこそこに、中納言が唐后を見初め、憧れ、ひそかに契りをもちながらも、恋の悦びも実感し得ないまま別れ、帰国後は、巻二において尼姫君との関

係修復が果たされると、巻三以降、唐后の実母である吉野尼君への、后に代わつての孝養と、その極楽往生の目撃、さらには、後の異兄妹である「ゆかり」の人々吉野姫君への急速な接近といった物語展開を前にして、そうしたながれの中核にあるのは疑いもなく唐后の物語であると、誰しもが諒解するところであらう。しかし、じつさいに物語の表現を微細に観察すると、そのような展開とはまた違った脈絡が、そこには織り込まれていることに気づかされるのである。

七 おわりに

そもそも、『御津の浜松』の主人公たる中納言という人物は、『無名草子』の評にもあるように、『源氏物語』の薫の再来ともいうべきその誠実な人柄が、全編を通じて強調・絶賛されているのであるが、じつのところ、その誠実さなるものも、よくよく見れば、目の前にある懸案事項について、つねに最善・全力を尽くすといった底のものであり、意地悪くいえば、その場しのぎをつづけているにすぎないものなのだ。そのような主人公を軸に物語が展開する以上、なにかひとつの人間関係や事柄が物語の持続的な推進力となることは、ほぼ期待できないわけであり、次々に主人公に課題が突きつけ

られることよつてのみ、物語は先へとすすむことができたのである。

例えば、現存卷一冒頭であれだけ鮮烈に打ち出されていた「孝養のこころざし」〔『全注釈』の補説では、「もちろんこれが首巻の冒頭というのではないことは種々の資料に徴して明らかなのであるが、何處もここから始まる文章に見慣れてしまうと、この文章から物語全体が始まってもあまり不自然を感じないような、むしろ冒頭にふさわしいものとの思いにかられてくる」〔二三頁〕との印象を披歴している〕が、念願の三の皇子との対面を果たすや、ほどなく頓挫する様子を見れば、中納言の決死の覚悟なるものも、たやすく変節するものであったことが明らかである。物語が、中納言の「孝養のこころざし」にこだわりつづけるのであれば、最終巻において、吉野姫君を亡き父宮の落胤、すなわち異母妹と公表すること、姫君を失う事態を回避しようとするなど、言語道断の沙汰であろう（このあたりの中納言の心情については、拙稿Bを参照）。にもかかわらず、中納言は、いかにも真剣に、その嘘が事実であったかのように振る舞い、恥じることもない。同様のことは、唐后への尽きせぬ憧憬をいう物語のもっとも重要な文脈においてもいえるのであり、最終巻にあつても唐后の絶対性が揺らぐようなことはないものの、中納言が目の前の吉野姫君の扱いに右往左往し、あれやこれやと思いを巡ら

しては煩悶する展開のなか、ついには、唐后が日本への転生を中納言の夢中に告げたあの場面の衝撃さえもが、しだいに色褪せてゆく感が否めないのだ。

最終巻、『御津の浜松』の纏れた糸は、新たに紡ぎだすなにか——それが物語を展開させる力となるはずであるが——を見出せないまま、終息する。物語の大尾にあつて、目の前のことに最善を尽くすのが身上の中納言が、いまなし得ることとはなにか。唐后の転生への期待に胸躍らせたのもいつとまのことであり、尼姫君との関係はすでに閉塞状態になつて久しく、吉野姫君との関係にもほとんど進展の可能性が閉ざされたいま、中納言はいずこへと向かうのか。中納言を佇立させたままのカタルシスなき結末——、首巻を散逸させたこの物語の現存卷一が奇妙な高揚感をもつて始まつたとき、このように暗鬱なる最後を迎えようとは、誰しも予想し得なかつたことであろう。永らく行方不明であつた最終巻が発見され、つぶさにそれを読むことで、われわれは物語の終末に立ち会うことができたわけであるが、正直なところ、中納言の場当たりの数々の独り相撲に散々付き合われてきた者としては、ここいらが潮時、との思いが深い。（二〇二二年五月稿）

注

注1

石山詣でが、中納言と大君との関係のどの時点でのことであつたかは、『大系』の解説に、「まことの契りをさかのぼるときか、はじめてのまことの契りのときか、又はのちか」(一四四頁)決し難いとして判断を避けているように、意見が分かれる。近年では、島内景二著『源氏・後期物語語型論』(一九九三年、新典社)第二章『浜松中納言物語』を讀む¹⁾や、久下裕利著『物語の廻廊——源氏物語からの挑発』(二〇〇〇年、新典社)I・五「入水譚」が、石山參詣のおりにふたりの間に最初の契りがあつたと見ていて、後者ではさらに、同じく孝標女の作とされる『朝倉』や『夜の寢覚』とも対照させながら、その経緯の復元にも努めているのだが、資料の扱いが恣意的にすぎるように思われ、にわかに従い難い。いまは、つとに石川徹著『古代小説史稿——源氏物語と其前後——』(一九五八年、刀江書院)第十八章『浜松中納言物語関卷の構想に就いて』が説いていたように、「まだこの時は、二人は仲の好い友達に過ぎなかつた」(四五三頁)のであり、『全集』の「散逸首卷の梗概」にいう、「色恋抜き」(二二二頁)の間柄であつたことと考えるたい。なお、中納言の歌に用いられた「かげをならぶ」という表現については、右の久下論文に言及があるほか、和田律子『孝標女の「石山」——『影をならべ』を中心に——』(横井孝・久下裕利編『平安後期物語の新研究——寢覚と浜松を考える』(二〇〇九年、新典社)所収)にも詳しい考察があるが、「にほの海」の語の表現性に関しては、いずれにもとくに言及はない。

注2

「うらなくなつかしびを通はい給ひし」からは、『伊勢物語』第四十九段、妹から兄への返歌に、「初草のなごめづらしき言の

注3

葉ぞうらなくものを思ひけるかな」(日本古典文学全集)本一七五頁)とあるのが想起されよう。なお、坂本信道「えせ兄妹致——浜松中納言と吉野姫君の恋物語と構想——」(前掲『平安後期物語の新研究——寢覚と浜松を考える』所収)は、「御津の浜松」を積極的に兄妹の恋の物語史に位置づけようとする斬新な試みであり、精緻な立論に教ええられる点が多いが、大君との関係については、「この兄妹の恋物語は物語の表面から姿を消している」(二五一頁)として、詳しい考察からは除外されている。

こうした中納言の見せる迂闊さ加減についても、拙稿Aを参照。また、夢から覚めた中納言が、「かうはるかに思ひやるとならば、大淀にでもあらず」(「妹背」の仲の一線を越えて)、思ひやりなうけ近う見なして、ほどなくはるかになりにしを、いかにおぼすらむ」(圈点筆者。五三頁)と大君を思いやるくだりの引歌表現(従来は、諸本に「おほよと」とあるのを、「おほよそ」の誤りと見て処理してきた箇所である)については、拙稿「それより後の物語は、思へばいとやすかりぬべきものなり」——『源氏物語』と物語史——(森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望 第六輯』(二〇〇九年、三弥井書店)所収)二〇七頁以下に詳述した。なお、浜松中納言物語の会校注『浜松中納言物語 卷一 注釈』(二〇一二年、私家版)に、拙稿とは関係なく、本文を「大淀にでもあらず」と定め、ここを引歌表現と見ての解釈と考察とがなされている【一〇】四五〜四九頁。

(からし ま さお・本学教授)